

日本統治下台湾・朝鮮・満洲における観光に関する研究動向

千 住 一

はじめに

本稿の目的は、日本による統治地域のなかでも台湾、朝鮮、満洲を対象とし、各地で生起した観光現象に着目した諸研究の動向を整理することにある(1)。周知のとおり、日本は日清戦争および日露戦争をきっかけに台湾、朝鮮、満洲を統治、占領し、アジア太平洋戦争終結に至るまで自らの影響下に置き続けたが、こうした植民地の獲得は観光の目的地拡大と同意であった。

近年、このようにして日本の統治地域において展開された観光の諸相を取り上げる研究が徐々に増えつつあるものの(2)、戸邊秀明(戸邊2008: 82)が指摘するように、まとまったかたちでの研究動向整理は未だなされていない。本稿は、こうした現状に鑑み、日本による統治地域のなかでも、観光と関連する研究成果を比較的多く蓄積してきた台湾、朝鮮、満洲を対象に、研究動向の整理を行おうとするものである。

以下、台湾、朝鮮、満洲の順で現在の研究状況を明らかにし、最後にその成果をまとめつつ今後の課題をいくつか提示したい。なお、本稿では関連する研究の網羅的な把握を試みたわけではないことを、予め断っておく(3)。

台湾

台湾に関しては、曾山毅(曾山2003a)による研究成果が最初に挙がる。現時点で、日本の植民地における観光をテーマにした唯一の単著書でもある『植

『殖民地台湾と近代ツーリズム』のなかで曾山は、まず、台湾において敷設された鉄道網は、台湾総督府による官設鉄道と日系製糖企業による私設鉄道／手押し軌道に大別されるとし、これらの鉄道網整備によって旅客の高速かつ大量輸送が可能となり、特に1930年代には利用者の大幅な増加が見られるとする。

続いて曾山は、官設鉄道と私設鉄道のあいだの接続や連絡輸送に関する制度の整備過程を整理し、また、台湾総督府鉄道部も一会員であったジャパン・ツーリスト・ビューローとの協力体制、鉄道省が発行していた内地専用遊覧券の台湾への適用、台湾内で使用可能な台湾遊覧券の発行、団体割引を代表とする各種割引制度の実施など、台湾総督府鉄道部によって担われた振興方策について指摘する。

その他、曾山は、鉄道事業に打撃を与えるまでに成長した自動車交通産業、台湾総督府鉄道部が発行していた『台湾鉄道旅行案内』、1927年に台湾日日新報社が主催した「台湾八景」に関する人気投票、日本による台湾統治開始40年にあたる1935年に開催された「始政四十周年記念台湾博覧会」などといった視点から、日本統治下台湾における観光の様相を記述していく。

また、曾山によると、山岳地域を安全に移動できるようになった1920年代以降、『台湾鉄道旅行案内』における山岳地域に関する記載が増加するとともに、当該地域の観光開発も活発になっていった。加えて1930年代以降は、レクリエーション性の高い登山やハイキングの愛好者が増加し、国立公園の指定をめぐる議論と相まって、山岳レクリエーションに対する社会的関心が喚起された(4)。

その後も曾山は『殖民地台湾と近代ツーリズム』での知見を拡充させるかたちでいくつかの研究成果を公表しており、例えば曾山(曾山2003b)は、「女性」という視点から台湾における観光のありように迫ろうとする。曾山は、台湾内に敷設された鉄道利用の場面において台湾人女性の乗車率が著しく低い点から、日本統治下において台湾人女性が置かれていた二重の支配構造を指摘するほか、台湾の民間航空会社が採用していた「エアガール」の社会的地位に関する考察や、日本が開発に着手した北投温泉における女性労働力に

ついでに言及を行う。

また、曾山(曾山2007a)は、台湾総督府鉄道部が1908年から1942年にかけて改訂を重ねながら発行した『台湾鉄道名所案内』、『台湾鉄道案内』、『鉄道旅行案内』、『台湾鉄道旅行案内』の記載内容を分析することにより、年を経るごとに観光／視察の対象が増加していくこと、なかでも特に「中央山地」における観光／視察の対象の増加が著しいこと、各案内で言及される観光／レクリエーション施設が増加していくこと、神社に代表される日本による台湾領有をシンボリックに表象する場所が増加していくことなどを指摘し、鉄道の敷設や利用客の増加と軌を一にするかたちで、台湾の旅行空間が拡張していく様子を描き出している。

ほかにも曾山(曾山2007b)は、1935年に開催され、約275万人が参加したとされる「始政四十周年記念台湾博覧会」に着目し、台北のみならず台湾各地に地方会場を開設して実施されたこの博覧会を契機に、台湾総督府鉄道部が臨時列車の運行や新車両の導入を行ったことや、博覧会への参加を通じて、台湾人大衆層の多くが「旅行」という新たな余暇の過ごし方を経験したことなどを指摘する。

以上のように、曾山が主に台湾総督府鉄道部を主体とする鉄道関連事業の視点から日本統治下台湾の観光について論じているのに対し(5)、松金ゆうこ(松金2001)は、「始政四十周年記念台湾博覧会」の会場のひとつでもあった嘉義市および阿里山の1930年代に注目し、それまでは伐木事業地であった阿里山が観光地化されていく過程を、市役所および有力商工業者の動向、阿里山の国立公園化といった観点から整理している。松金によると、阿里山が観光地化していく過程においては、宿泊施設の整備や集客イベント開催のほか、日本人および西洋人向けの観光宣伝や土産物販売が積極的に展開された。

また、神田孝治(神田2003)は、台湾を訪れた人々が書き残した紀行文や、曾山が取り上げた「始政四十周年記念台湾博覧会」をめぐる表象、松金が言及した台湾における国立公園選定に際して顕在化した議論などを検討することによって、複数の要素が輻輳する台湾の「心象地理」が構築されていたことを明らかにする。加えて神田は、このような心象地理を前提として台湾

における観光空間が生産され、さらには、こうした観光空間が日本による台湾統治の正当性を維持する文化的装置として機能していたと指摘する。

ところで近年、日本統治下台湾における観光のありようを明らかにする作業の一端として、台湾住民に対する聞き取り調査が試みられている。例えば曾山(曾山2009)は、1918年から1930年生まれの漢族系住民男女計8名に対するインタビュー調査を実施し、その結果から、農村地帯では旅行機会が少なかったことや、列車の座席等級や温泉利用の場面において、日本人と台湾人とのあいだに暗黙的な差別構造が存在していたことなどを明らかにした。その後も同様の調査は継続され、曾山(曾山2011)は、日本による統治を経験した住民計26名に対してインタビュー調査を行い、修学旅行への参加率が属性に関わらず高かったことや、海水浴や温泉浴を経験したのは比較的経済的に裕福な家庭に多かったことなどを明らかにし、そこから、当時の旅行経験と教育あるいは職業といった社会的要因とのあいだの関連性を示唆している。

こうした試みは稲垣勉(稲垣2009)によっても着手されており、稲垣は、廬山温泉の開発に地域住民として関係しつつ、自らも当該地において温泉旅館の経営を行っていた台湾先住民夫婦から聞き取りを行うことにより、それまで等閑視されてきた山間部の土地が、観光開発を経由することによって商品価値を帯びていった過程を素描する。

朝鮮

朝鮮における観光に関しては、李良姫(李2007)がその概要を整理している。李はまず、韓国統監府や朝鮮総督府が着手した鉄道事業の展開に目を向け、朝鮮内に鉄道が敷設されたことによって日本人だけでなく朝鮮人による観光も活発化したことや、韓国統監府鉄道管理局や朝鮮総督府鉄道局が多数の旅行案内書や観光映画を日本人および西洋人向けに作成し、それらのなかで特に金剛山が目的地として前面に押し出されていたことを指摘する。

李は続いて、併合の前後に活発化した朝鮮および満洲を目的地とする内地からの視察団に言及し、使節団にとっては朝鮮に対する日本の優位性を確認する場面が、為政者にとっては使節団に対して日本による朝鮮統治の正当性

をアピールする場面が、それぞれ行程のなかに存在していたと主張する。また李によると、朝鮮および満洲を目的地とする内地からの修学旅行が1920年代に入ると増加し、修学旅行では、いかにして植民地を統治し経営すべきであるかについて考えることが目的化されていたという。

一方、朝鮮人有力者を参加者とする内地への観光団もたびたび組織された。なかでも李は、女性教員たちによって組織された内地観光団に着目し、そこに為政者による親日派への取り込み工作を見出すだけでなく、内地を実見した観光団参加者によって「内鮮融和」にもとづく教育実践が行われることを、為政者が観光団実施に際して期待していた点を看破する。

このように李は、交通インフラの整備と情報の流通、朝鮮を目的地とする内地から人流、内地を目的地とする朝鮮からの人流という視点から、日本統治下朝鮮における観光の諸相を描き出しているが、同様の試みは、ケネス・ルオフ(ルオフ2010: 171-204)によってもなされている。ルオフは、著書『紀元二千六百年』に「朝鮮観光」という章を設け、そのなかで、朝鮮総督府鉄道局とジャパン・ツーリスト・ビューロー朝鮮支部が日本人および西洋人に対して金剛山観光を中心に据えた宣伝活動を行ったことや、朝鮮観光の場面においては鉄道のほかに「遊覧バス」という手段が大きな役割を果たしていたことなどを指摘する。

李やルオフが着目する観光と関わるメディアについては、阿部安成(阿部2004)が朝鮮総督府鉄道局による発行物を取り上げている。阿部によると、朝鮮総督府鉄道局はいくつかの旅行案内書を作成しているが、それらには記述の重複がみられる上、朝鮮の歴史に関する言及が必ずと言ってよいほど含まれている。そして、各案内書のなかで示される歴史観とは、日本による併合を必然的な出来事としてとらえ、それを正当化するものであると阿部は言う。加えて阿部は、朝鮮という場所が旅行案内書のなかで均質的な空間として位置づけられているのではなく、「都市」を頂点とし「自然」を最下層とする序列が、案内書における記述を通じて構築されていると指摘する。このように阿部は、ツーリストが参照する旅行案内書というメディアのなかに、日本による朝鮮統治に歴史的正当性を付与し、また、統治地域たる朝鮮を細

分化し序列付けするという機能を見出す。

さて、李やルオフが示唆するように、日本統治下朝鮮には日本人だけではなく西洋人も多く訪れた。砂本文彦(砂本2005)は、朝鮮において西洋人向けに開発されたリゾートに着目し、その開発推進の背景として、1917年以降、朝鮮総督府鉄道局が南満洲鉄道株式会社の委託経営になったことや、1927年に欧亜国際連絡運輸が実現したことによりヨーロッパとアジアのあいだの往来が簡便になったことを指摘し、また、このような鉄道行政の影響を受けたりリゾート開発の一事例として、金剛山における観光開発を取り上げる。後に砂本(砂本2009)は、こうした議論の精緻化を図っており、朝鮮を訪れた西洋人の具体的な姿やその背景としてあった欧亜国際連絡運輸の存在、西洋人宣教師たちに端を発する別荘地あるいは避暑地の開発、朝鮮総督府鉄道局、南満洲鉄道株式会社、金剛山電気鉄道株式会社、金剛山協会が関係し、国立公園化の思惑が交錯した金剛山の観光開発などについて、より詳細な整理を行っている。

満洲

最後に満洲について見ていくと、高媛(高2008)は、日露戦争前後の満洲をめぐる言説に注目し、満洲イメージが戦争を挟んで「辺界」から「富源」へと転換していったことを指摘しつつ、その過程で、満洲を対象とする「観戦旅行」や「利源調査」が実施されていたことを明らかにし、そこに将来的な満洲観光の素地形成を見出そうとする。

また、荒山正彦(荒山2001)は、日露戦争における激戦地のひとつであった旅順に着目し、南満洲鉄道株式会社が作成したリーフレット『満洲旅行案内』や『満支旅行年鑑』といった史料を参考にしながら、日露戦争終結後、旅順が特に「戦跡」を前面に押し出して観光者誘致を行っていたことを明らかにする。続いて荒山(荒山2003)は、同じく南満洲鉄道株式会社が作成していたリーフレット『満洲旅行の栞』や『満支旅行年鑑』にもとづき、1930年代以降、旅順、大連、奉天、新京、哈爾浜の各地で運行されていた「遊覧・観光バス」の概要についてまとめる。

高(高2002a)は、荒山が指摘する満洲各地に敷設された観光バスの存在に着目し、バスの車内でどのような「口上」がガイドによって実演され、また、各地を走るバスが満洲という場所のどのような局面を意識的に経巡っていたのかについて論じる。また、ルオフ(ルオフ2010:205-229)は、「満洲聖地観光」と名付けた章のなかで、満洲を訪れた人々が書き残した旅行記を参考にしながら、荒山や高が指摘したバスによる移動も含めた満洲での旅程を再構成している。

さて、満洲への訪問者という観点において、「学生／生徒」の存在を無視することはできない。例えば、内田忠賢(内田2001、内田2002)は、1939年に満洲各地を訪れた東京女子高等師範学校の在校生たちによる団体旅行の存在を指摘する。内田によるとこの旅行は、文部省および陸軍省による指導と在満各団体の協力の下で実施された。内田は参加者によって記された『大陸視察旅行所感集 昭和十四年』の内容を検討し、また、旅行参加者への聞き取り調査を行うことにより、東京女子高等師範学校が実施した満洲旅行の輪郭を描き出そうとする。

同様に、長志珠絵(長2007)は、内田が取り上げた東京女子高等師範学校に加え、同じく1939年に満洲各地を訪れた奈良女子高等師範学校の在校生たちによる団体旅行を考察対象とし、両校の旅行のありようや旅行にまつわる諸記録を比較検討しながら、1939年という日中戦時下において実施された満洲旅行の位置づけを探ろうとする。その後、長(長2011)は、すでに取り上げた東京女子高等師範学校および奈良女子高等師範学校のほかに、山口高等商業学校、東京商科大学、長崎高等商業学校、福島高等商業学校といった各校による満洲旅行への取り組みを踏まえ、上記の試みをより精緻化している。

このように満洲における観光が展開していくなか、観光と関わるメディアが多く生み出されていった。例えば荒山(荒山2008)は、折りたたんで持ち運ぶことが可能な「リーフレット」を旅行案内書と絵葉書の中間的なメディアと位置づけた上で、南満洲鉄道株式会社が1930年代に発行したリーフレットを取り上げ、交通機関を主軸に据えながら満洲観光のありようを整理するほか、リーフレットのなかで描かれている大連、旅順、新京、奉天、安東といっ

た満洲各都市の様相を明らかにしている。

また、メディアとの関連で指摘するならば、高(高2009)は、大連で発行されていた邦字新聞『大連新聞』に着目し、『大連新聞』が1929年に実施した「満洲八景公選」を取り上げている。高によると、多数の組織的投票が行われたこのメディア・イベントの結果からは、在満日本人の有するナショナリズムとともに、満洲を「故郷」と認識する「愛郷心」が発露していく過程が看取されるという。

その他、吉川容(吉川2007)は、観光インフラと位置づけうる宿泊業や旅行業の満洲における展開をまとめている。吉川は、南満洲鉄道株式会社が直営するヤマトホテルを除き、会社組織としての宿泊業は1920年代までほとんど存在しなかったこと、1930年代に入って小規模資本による宿泊業が誕生し始めたこと、1912年に設置されたジャパン・ツーリスト・ビューロー大連支部が、実質的には日本の本部から独立して南満洲鉄道株式会社の支配下で運営されていたことなどを指摘する。

ところで、先の朝鮮の項における李の研究成果が示唆していたように、当時の朝鮮と満洲は「鮮満」あるいは「満韓」といったかたちでセットとして目的地化される傾向が強かった。既存研究においてもこうした観光の形態に着目したものが散見され、例えば、有山輝雄(有山2002: 18-88)は、1906年に朝日新聞社が主催した「満韓巡遊旅行会」、その後も各新聞社によって繰り返し催行された朝鮮および満洲への団体旅行、徐々に活発化していく鮮満／満韓を目的地とした修学旅行の動向などを整理している。同様に阿部(阿部2008)は、山口高等商業学校が1907年から開始した朝鮮および満洲を目的地とする修学旅行の成立ならびに変遷過程を、学内史料にもとづきながら当時の社会的背景を踏まえつつ整理し、荒山(荒山1999)は、1931年に東京鉄道局が主催した「鮮満使節団」による朝鮮および満洲への団体旅行の実態を、同年に東京鉄道局が作成した『鮮満の旅』に依拠しながら再構成している。

おわりに

ここまで、日本統治下台湾、朝鮮、満洲における観光現象を主題とする研究の現状を地域別に整理した。最後に、これまで行ってきた動向整理をいくつかの視点からまとめつつ、今後の発展可能性について記したい(6)。

第一の視点は、研究領域の新規性についてである。本稿で言及した研究は、地域に関わらずそのほとんどが2000年代に入ってから公表されたものであるが、逆に言うとはこれは、日本統治地域における観光現象というテーマが2000年代に入るまで等閑に付されていたことを意味する。近年における研究の加速の一要因として、人文諸科学による植民地における文化史への関心の高まりを指摘することができようが(7)、その一方で論者の数が十分ではないこともまた、本稿での整理によって明らかにされた。論者の少なさは分析視点の固定化に結び付き得る。より多くの論者が対象に集うことによって、多様な知見が積み重ねられていくだけではなく、結果的に日本による植民地統治と観光の関係がより大局的かつ重層的に明らかにされていこう。

第二の視点は、論点の特徴についてである。曾山(曾山2011: 97)は、日本による植民地統治と観光に関して、「日本が植民地を旅行目的地としてどのように眼差し、どのような旅行が実際に行われたかについて分析する研究」と「それぞれの植民地で旅行や観光がどのように行われたかについて、現地の社会や文化、現地政府の政策などの考察を通じて明らかにする研究」のふたつに大別できるとしている。そうしたなか、鉄道やバスといった観光と深く関わる交通機関についての知見や、交通事業者が作成、発行する観光関連メディアに依拠した考察、観光とは位相を異にする教育制度が実現させた旅行に関する分析が、地域を問わず目立つことが本稿での整理によって浮き彫りにされた。

しかしながら、植民地観光そのものを可能にさせた内地と植民地を結ぶ船舶あるいは航空への言及はあまり多く見られないし(8)、同様に観光の成立要件という観点からは、宿泊業や旅行斡旋業についての考察が不足しているように思われる。また、多くの論者が依拠する観光関連メディアについては、

史料上の制約があるのかも知れないが、交通事業者以外が作成したメディアや紙媒体以外のメディアへの着目可能性を指摘しておきたい。そして、内地から植民地への団体旅行に関しては、教育機関以外にも新聞社などによる取り組みが既存研究によって取り上げられているものの、そのほかの組織によって主催されたであろう団体旅行の存在については、疑問が残る。

第三の視点は、観光の主体についてである。日本の統治地域における観光という課題を設定した場合、多くの研究がそうであるように、考察の対象は「内地の日本人」による植民地への観光となる。その一方で、曾山や李が指摘するように植民地居住の被統治者も観光に参加しているし、砂本が言及するように日本の植民地を訪れたのは必ずしも内地の日本人だけではなかった。同様に、李が明らかにしたような内地を目的地とする植民地住民による観光も存在し、また、鮮満／満韓という観光のありようは植民地間の移動を前提としていた。

このように、日本植民地における観光という現象は、内地から植民地へという人流のみならず、植民地から内地へ、植民地から植民地へ、西洋から植民地へ、そして植民地内における人流というように、様々な主体による多方向への人間の移動の上に成り立っていたことが本稿での整理を通じて明確になった。しかしながら、曾山や砂本、李が着目するような流動に関する考察は手薄であると言わざるを得ない。また、観光主体への接近手法についても文字史料にもとづく分析が主流を占めており、今後の困難が予想されるなか、曾山や内田が行ったような観光経験者に対する聞き取り調査への期待は大きい。

以上、日本統治下台湾、朝鮮、満洲における観光現象に関する研究動向について整理したが、第一の視点でも触れたように、本研究領域をめぐる知見の蓄積は、日本による植民地統治のありようを観光という視点から明らかにしていくことに繋がる。本稿での整理により明らかなように、植民地を舞台とした観光にもとづく人流は紛れもなく日本による統治構造を形成する要素のひとつであって(9)、植民地における観光の展開は支配地域の社会に一定の影響を与え続けた。今後、観光という現象を切り口として日本による植民地

統治の全体像に迫っていくためには、本稿で取り上げた台湾、朝鮮、満洲以外の日本統治地域も視野に入れていく必要があるのはもちろんのこと(10)、個別地域に関する考察のみで完結しない視座の設定が求められよう(11)。

注

- (1)本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)「国際観光局設置に至るまでの観光政策立案過程に関する歴史学的研究」(研究代表者：千住一)による研究成果の一部である。
- (2)本稿が取り上げる個別の研究のほかにも、『彷徨月刊』2003年8月号が「満洲のツーリズム」という特集を組んでいる。
- (3)例えば、曾山(曾山2011：98-99)は、近年の台湾において日本統治時代の観光をテーマとする学位論文が多く提出されていることを指摘しているが、本稿では、これらの研究成果に言及することができていない。
- (4)曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』のより詳細な内容および評価については、千住による書評(千住2006)を参照のこと。
- (5)以上の曾山による一連の研究成果については、曾山の別稿(曾山2008)においても言及されている。
- (6)本稿では言及することができなかったものの、例えば、李(李2007：160-161)が朝鮮総督府による観光政策と戦後韓国におけるそれとのあいだの連続性を指摘し、荒山(1999：11-14)や高(高2006)が、日本統治下で観光地化された旅順の現代観光における位置づけを論じているように、日本統治時代と現代の接点を探る試みも行われている。今後の発展可能性という観点から指摘しておきたい。
- (7)この点に関しては、柳沢・岡部(2001：9-12)や戸邊(戸邊2008)が詳しい。
- (8)船舶に関しては、荒山(荒山2007)が行った大阪商船株式会社による沖縄観光に関する考察が示唆深い。また、台湾と内地間の航空については、曾山(2003a：159-163)が若干の考察を行っている。
- (9)高崎(高崎1993)が整理するように、従来の植民地研究では、日本による統治を支えた人流として労働移民の存在が中心的な課題として取り上げられている。
- (10)日本統治下南洋群島における観光を取り上げた研究には、荒山(荒山2010)や千住(千住2009、千住2010)がある。
- (11)こうした指向性を有する研究として、荒山(荒山2011)と高(高2002b)を挙げておきたい。

参考文献

- 阿部安成2004「植民地観光のなかのナショナリティ：20世紀初頭の朝鮮というフィールド」(『アジア民衆史研究』9：49-66)。
- 阿部安成2008「大陸に興奮する修学旅行：山口高等商業学校がゆく「満韓支」「鮮満支」」(『中国21』29：219-236)。
- 荒山正彦1999「戦前期における朝鮮・満洲へのツーリズム：植民地視察の記録『鮮満の旅』から」(『関西学院史学』26：1-22)。
- 荒山正彦2001「戦跡とノスタルジアのあいだに：「旅順」観光をめぐる」(『人文論究』50(4)：1-16)。
- 荒山正彦2003「満洲観光の軌跡：20世紀前半期における中国へのまなざし」(阪倉篤秀編『さまざまな角度からの中国論』晃洋書房：167-182)。
- 荒山正彦2007「大阪商船と近代ツーリズム：二つのツーリズム空間という視点から」(『人文論究』57(3)：1-24)。
- 荒山正彦2008「リーフレットからみる満洲ツーリズム」(中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験：絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版：163-181)。
- 荒山正彦2010「「海の生命線」南洋群島の記憶」(『地理』55(2)：38-47)。
- 荒山正彦2011「忘れられた植民地ツーリズムの軌跡」(『時計台』81：16-22)。
- 有山輝雄2002『海外旅行の誕生』吉川弘文館。
- 稲垣勉2009「聞き書き廬山温泉成立史」(『交流文化』9：34-41)。
- 内田忠賢2001「東京女高師の地理巡検：1939年の満州旅行(1)」(『お茶の水地理』42：31-36)。
- 内田忠賢2002「東京女高師の地理巡検：1939年の満州旅行(2)」(『お茶の水地理』43：25-32)。
- 長志珠絵2007「『満洲』ツーリズムと学校・帝国空間・戦場：女子高等師範学校の「大陸旅行」記録を中心に」(駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂：337-377)。
- 長志珠絵2011「「過去」を消費する：日中戦争下の「満支」学校ツーリズム」(『思想』1042：94-120)。
- 神田孝治2003「日本統治期の台湾における観光と心象地理」(『東アジア研究』36：115-135)。
- 吉川容2007「サービス産業」(鈴木邦夫編『満洲企業史研究』日本経済評論社：973-993)。
- 高媛2002a「「楽土」を走る観光バス：一九三〇年代の「満洲」都市と帝国のドラマトゥルギー」(『岩波講座近代日本の文化史6：拡大するモダニティ』岩波書店：215-253)。
- 高媛2002b「「二つの近代」の痕跡：一九三〇年代における「国際観光」の展開を中心に」(吉見俊哉編『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社：127-

164)。

高媛2006「『国辱』と観光：旅順の歴史景観と戦争記憶の商品化」(同時代史学会編『日中韓ナショナリズムの同時代史』日本経済評論社：43-60)。

高媛2008「戦地から観光地へ：日露戦争前後の『満洲』旅行」(『中国21』29：203-218)。

高媛2009「租借地メディア『大連新聞』と『満洲八景』」(『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』4：21-33)。

砂本文彦2005「近代期朝鮮半島におけるリゾート地開発に関する研究」(『日本観光研究学会全国大会学術論文集』20：85-88)。

砂本文彦2009「日本統治下朝鮮半島における国際観光地・リゾート地開発に関する研究：植民地時代の観光とリゾート」(『訪韓学術研究者論文集』9：71-101)。

千住一2006「書評：曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社，2003年11月，全342頁」(『立教大学観光学部紀要』8：65-70)。

千住一2009「植民地統治と『観光』政策：日本統治下南洋群島における内地観光団を事例に」(寺前秀一編『観光学全集第9巻：観光政策論』原書房：227-259)。

千住一2010「内地観光団の『媒介性』：軍政期日本統治下南洋群島を事例に」(遠藤英樹・堀野正人編『観光社会学のアクチュアリティ』晃洋書房：202-217)。

曾山毅2003a『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社。

曾山毅2003b「植民地台湾のツーリズムと女性」(『女性文化研究所紀要』12：1-18)。

曾山毅2007a「『台湾鉄道旅行案内』と植民地台湾の『旅行空間』」(『九州産業大学商経論叢』48(1)：99-118)。

曾山毅2007b「『始政四十周年記念台湾博覧会』と台湾鉄道」(『名桜大学紀要』10・11：41-46)。

曾山毅2008「植民地台湾における『近代観光』の形成」(『中国21』29：237-256)。

曾山毅2009「日本統治期の台湾における旅行と観光のオーラルヒストリー(I)」(『商経論叢』50(2)：175-186)。

曾山毅2011「日本統治期台湾におけるツーリズムのオーラルヒストリー」(『商経論叢』51(2)：97-112)。

高崎宗司1993「第5巻まえがき」(『岩波講座近代日本と植民地5：膨脹する帝国の人流』岩波書店：v-xiv)。

戸邊秀明2008「ポストコロニアリズムと帝国史研究」(日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社：55-88)。

松金ゆうこ2001「植民地台湾における観光地形成の一要因：嘉義市振興策とし

特集 変貌するアジアと観光

ての阿里山観光」(『現代台湾研究』22:110-124)。

柳沢遊・岡部牧夫2001「解説・帝国主義と植民地」(柳沢遊・岡部牧夫編『展望 日本歴史20:帝国主義と植民地』東京堂出版:1-12)。

李良姫2007「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」(『北東アジア研究』13:149-167)。

ケネス・ルオフ2010『紀元二千六百年:消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版。